

# 学校出版事業のいま昔——アイデア書院から大学出版へ

## 記念講演 ①

森 貴志（梅花女子大学）

キーワード：アイデア書院、小原國芳、高井能、山村暮鳥、大学出版

梅花女子大学の森貴志と申します。本日はこのようなイベントにお招きいただき、誠にありがとうございます。

アイデア書院設立 100 周年、『児童百科大辞典』刊行開始 90 周年とのことで、先ほどご紹介いただきましたように、その間、わたくしも一昨年の 4 月末日まで玉川大学出版部編集課で本づくりをしていた身ですが、100 年もの長い間、出版活動を継続してきたこと、そしていまも継続していること、心よりお祝い申し上げますとともに、これからのますますのご発展を、最初にお祈り申し上げます。

### 自己紹介にかえて

いま、わたくしはこの玉川の丘に勤めていたと申し上げましたが、本日は学生のみなさんが多くいらしていると聞いています。たとえば『大学生生活ナビ』（小原芳明監修、玉川大学編）や『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』（松本茂・河野哲也）などの書籍をお持ちかと思います。これらは、わたくしが編集を担当しました。それから、先ほどわたくしをご紹介してくださった佐久間先生、そして最後にごあいさついただく今尾先生とは、何冊も本をつくってきました。また、学長先生、理事のみなさまとは、いまは年に 5 回かと思いますが、かつては毎月、出版の企画について吟味する時間をもっていました。

そういう意味で、今回、わたくしが呼ばれたのかと思いますが、退職した者にお声をおかけいただいたこと、非常に光栄に思っております。「編集」というのは、人と「密」な関係で仕事をします。ぶつかることもあります。そういったことがわたくしとあった方がこの会場にいらしたら申し訳ないのですが、少々おつきあいいただければと思います。

### 本日の目次

本日はまずアイデア書院という出版社・団体について

ひも解くことから始め、「児童百科」についてはかんたんに触れることのみになるかと思いますが、最後に現在の玉川大学出版部の形態である「大学出版」について考えるところまで行き着きたいと考えています。スライドをつくってありましたら資料がけっこうありまして、60 枚以上になってしまいました。そのうち 45 枚くらいがアイデア書院に関するものですので、その部分が多くなるかと思います。あらかじめご了承くださいければと思います。

### (1) 「アイデア書院」とは何だったのか

#### 「アイデア書院」とは

最初にアイデア書院について歴史的なことを確認しておきたいと思います。

現在の玉川大学出版部の前身とされるアイデア書院は『アイデア』という雑誌を 1923 年（大正 12 年）1 月に発行するところから具体的な出版活動を始めるのですが、その 1925 年 12 月号に「大正十一年（西紀一九二二年）十二月二十五日、クリスマスの当日、アイデア書院は創立」と記されています（高井能「アイデア書院創立「アイデア」誌創刊 満三週年を迎えて」（ママ））。ですので、12 月 25 日はもうすぐですけれども、ちょうど 100 年前につくられた団体であることがわかります。1929 年（昭和 4 年）に玉川学園をつくった小原國芳が設立したといわれますが、組織形態も含め、そのあたりははっきりしないように思います。小原國芳がどこまで関わっていたのかも、現段階のわたくしの調査では不明と考えています。

いずれにせよ、1923 年 1 月に雑誌『アイデア』が月刊で発行され、さらにその年の 3 月に書籍が刊行されます。1 点目は、小原國芳の『自由教育論』です。その後、飛びますが、1929 年に玉川学園ができ、その出版部に合併するまでの 7 年弱という短い期間に、書籍だけで約 200 点を刊行します。単純に割って平均すると

1年に30点くらい刊行していたことになりまして、けっこうな点数です。いまの玉川大学出版部より多いかもしれません。それなりの規模の出版活動を展開していたといえます。

ちなみに、1929年に玉川学園出版部となったあと、1947年（昭和22年）に玉川大学出版部と改称されます。

### 大正末期の出版状況

アイデア書院が設立された頃の日本の出版状況を見ておきましょう。

1887年（明治20年）に博文館という出版社ができます。『太陽』という雑誌を発行していた出版社としても有名です。いま、みなさんがご存知のような出版社でいうと、新潮社（新声社）が1896年（明治29年）、講談社（大日本雄弁会）が1909年（明治42年）、岩波書店が1913年（大正2年）、玉川学園出版部は事典（辞典）を多く刊行しますが、百科事典で有名な平凡社もこの頃、1914年（大正3年）に設立されています。のちに「円本ブーム」、1円の本をセット組みで予約販売して大ブームを巻き起こす改造社もこの頃、1919年（大正8年）。文藝春秋社も1923年（大正12年）というような状況です。ここに挙げたのは、わたくしが適当にピックアップしたものですので、ほかにもこの頃、出版社はたくさんできていました。出版のブームの時期だったといえます。

また、のちほど児童文学、児童読みものについて触れることとなりますが、この時代は子ども向けの雑誌が多く出された時期でもありました。1918年（大正7年）に鈴木三重吉の『赤い鳥』が創刊されますが、そのほかにも『子供之友』、『金の船』、『コドモノクニ』などがあり、『コドモアサヒ』、これは朝日新聞社が出したのですが、そのほかにも『キンダーブック』、あるいは雑誌ではありませんが、講談社の絵本シリーズが1936年（昭和11年）に刊行を始めました。なお、いま絵本・児童書といえば福音館書店という出版社を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、福音館の『こどものとも』は戦後、1956年（昭和31年）の創刊です。

ここで『赤い鳥』について書かれた文章を紹介しておきますと、「大正時代はまた、「新教育」「自由教育」のさまざまな試みが実践された時期である。欧米でおこった児童中心主義的な教育思潮は、エレン・ケイの『児童の世紀』が翻訳されるなど、日本にも流れこみ、子どもの興味や自発性を尊重する教育改革の動きとな

っていく。そのなかで、成城小学校や自由学園、文化学院などの私立学校が創設された」（佐藤宗子『『赤い鳥』の出現』、鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、2001年）。これは児童文学史のテキストからの引用ですが、文学史で学校の歴史が取り上げられていることは注目すべきことかと思えます。

### アイデア書院をめぐる人たち

このように、出版ブームの時代で、出版点数も急激に伸びた頃に、アイデア書院も設立されました。次に、人物関係を確認しておきましょう。

ここで登場するのは、小原國芳の妻である信（のぶ）です（敬称は略してお話しますので、その点にご容赦ください）。國芳の妻である信、そして信の父である高井太（ふとし）、信の弟である能（ちから）をはじめとする高井家の面々がアイデア書院で活躍したことが、『アイデア』を見るとわかります。小原國芳はそれまで集成社という出版社で本を出していましたが、自分で出したほうがいいと思い、アイデア書院をつくったともいわれます。ですが、実際に動かしていたのは高井家を中心とした人々だと考えられます。

### 『アイデア』の奥付

このスライドに映しているものが『アイデア』の創刊号です。玉川大学教育学術情報図書館には『アイデア』が所蔵されていますが、B6判ほどの小さな雑誌で、ページ数もそんなにありません。毎号、薄いものです。

その奥付、本の最後にある部分には、編集者「小原のぶ」、発行者「高井太」とあります。小原國芳の名前はありません。

たいてい、出版物の奥付の「発行者」の欄には、その出版社（団体）の代表者の名前が入ります。いま、玉川大学出版部では「小原芳明」と、学長・理事長先生のお名前が入っています。しかしながら、ここでは小原國芳ではなく、「高井太」とあることに注目しなければなりません。つまり、代表者は小原國芳ではなく、高井太である。だとしたら、アイデア書院をつくったのは誰か。この点は先ほどはっきりしないように思うと申しましたが、検討が必要かと思えます。

この創刊号、1号をざっと見てみましょう。表紙の右下に小さく目次が載っています。ここに目次を書き出してみましたが、小原國芳による文章が多く、ほかには高井家の人々による執筆です。

「アイデア」に

児童図書室論 小原國芳

どんな本を子供達に 小原國芳

賀川豊彦君訪問記 くによし

シューベルトについて 高井能

編輯室 高井望

この創刊号には、「アイデア書院の誕生」というページもあります。「生まれましたわけ」とあり、そこにはこうあります。

小原國芳氏の一生の事業を援助する為に生まれました。弊店の一切の純益は、同氏の学校経営に捧げるのでございます。日本教育、人類文化の為に、皆様の御同情を願ひます。

すなわち、アイデア書院は小原國芳の事業、「学校経営」のためにあると宣言されているわけです。アイデア書院をつくったのは誰なのか。よくいわれているように小原國芳なのなら、自分の「一生の事業に援助する為」につくったということにもなり、ややおかしなことになるので、やはりその設立の経緯についてはまだ調査が必要かと思ひます。もちろん、自分のためにつくる団体であると明言しづらかったために別の人物を代表者にしたとも考えられます。

そして、アイデア書院というと出版社と思いがちなのですけれども、出版でない事業も展開しています。こうあります。

#### □出版部

一、弊店は主として、教育、哲学、芸術、宗教等に関するものを出版いたします。

一、弊店は松原文学士、小原文学士を顧問とし、両氏の賛同せざるものは一才出版いたしませぬ。随分如何はしい本を商売的に出しては地方の読者の方を苦しめる小僧上りの本屋の多いことは実に慨嘆にたへませぬ 真に精神的に文化的に有意義な本でなければ出しませぬ。原稿の批判、著者の選定を慎重にして貰ひます 御信用下さいませ。

一、弊社発行の書籍は、落丁その他の不備の点については、一切その責に任じます。

#### □取次売販部

蓄音機レコード—名画—名著

日本の音楽教育に美術教育に読書教育を根本的に改造し促進したい大使命の為に、殆んど奉仕的に販売部を設けました。是非御利用下さい。

豊かにして深く、美しくして清いものを早く子供に与えて下さい。名著に名画に名著、これが確かに日本芸術教育を根本的に改造するでせう。

レコードは需要者が多くて、東京ですら船が来て二日も立てば売り切れです。地方へ中々いいものは行きませぬ。特約が出来ましたから御利用下さい。

このように、アイデア書院は自身の出版だけでなく、ほかの出版社の本の取次、蓄音機・レコード、名画までを扱っていました。さらに、のちには「貿易部」までつくっていました。

それから出版ということに関しても、雑誌、書籍だけでなく、楽譜もつくっていましたので、音楽には関心をもっていたといえるのではないのでしょうか。

#### アイデア書院の思想

こんなアイデア書院ですが、『アイデア』創刊号の巻頭には、小原國芳の「児童図書室論」が掲載されています。当然ですが、雑誌の創刊号、しかもその巻頭となると、読者への強いメッセージが込められていると考えられます。小原國芳が、あるいはアイデア書院が最初に伝えたかったことは、この「児童図書室論」といえるでしょう。書き出しはこうです。

近來の読書熱は実に喜ばしいことである。ゼヒこれを永續させ、しかも一層強めたいものである。ドイツやアメリカの小供に比べたらマダマダ御互は御話にらない。私は年頭に際し、日本教育への第一の祈りを、児童図書室の建設の問題とする。(ママ)

このように述べ、「読書の趣味を日本人につけたい」、「児童のあの貪る如き知求心をどうして充たしてやろう。どうしても図書室を要求する」、「学問的雰囲気は学校のドコかに溢れて居たい」とも記しています。

これに関連することですが、アイデア書院は児童図書室の建設、学校劇研究会や児童文学研究会などの運営などもおこなっていました。

ちなみにこの『アイデア』という雑誌の部数ですが、2号に「アイデア」が、思ひがけなくも沢山出ます。(中略)一萬四千の封筒をかいて、封をいたします丈けでも五人の子供に老母まで六七人係で、毎晩十二時まで

も仕事がかかります」(高井太「感謝とおわび」)とあります。1万4,000もの購読者がいるということですが、かなりの数だと考えられます。これもいまの出版部の部数と比較してしまえば、1万4,000とは非常に大きな数字ですので、これは驚くべきことかと思えます。

今度は書籍からアイデア書院を見てみたいと思いますが、小原國芳の『自由教育論』がアイデア書院から刊行された最初の書籍です。表4と呼びますが、本の裏面には、アイデア書院のロゴなのか、idea という文字がデザイン的に空押しされています。ちなみに同じデザインの文字が、雑誌の『アイデア』の表紙にも入っています。このidea というロゴは、何種類かあるようです。

その『自由教育論』の奥付を見てみたいと思いますが、上段にこうあります。

- 一、主として教育、哲学、芸術、宗教に関するものを出版いたします。
- 一、松原文学士、小原文学士を顧問とし、原稿の批判、著者の選定を慎重にし、真に精神的に文化的に有意義な本でなければ出さぬ。
- 一、落丁その他不備の点について、一切その責に任じます。

雑誌『アイデア』に掲載されていたようなことが書籍にも載せられています。そして、著者は小原國芳で、発行者は「高井太」となっています。

ただし、これがいつからこうなったのかさらに調査が必要ですが、1924年9月刊行の書籍の巻末ではこうなっています。

- 一、弊院の一切の純益は「教育の王国」実現のためにささげるのです。
- 一、弊院は主として教育・哲学・芸術・道徳・宗教及び児童読物に関するものを出版いたします。
- 一、松原、小原両文学士及びその恩師先輩学友の作品を出版いたします。その外はその方々の推薦による権威あるものにあらざれば出版いたしません。
- 一、落丁その他不備の点については一切その責に任じます。

1行目に新しい一文が入っています。そして、2行目の出版するジャンルに「児童読物」が加わっています。「小原國芳氏の一生の事業」である「学校経営」、

それを「教育の王国」実現」とし、さらに『アイデア』創刊号の巻頭でも述べられていた子ども向けの本、「児童読物」を明確に打ち出したといえるでしょう。

### 高井能という編集者

時間が戻りますが、『アイデア』6号の奥付では発行者が「高井能」になっています。太の健康状態が悪くなったようで、この後、能がアイデア書院の中心的人物となります。

『出版年鑑』という業界の年鑑があります。1925年版には、アイデア書院の代表者として「高井能」の名前が掲載されています。そしてアイデア書院の出版活動の案内として、「日比谷図書館にてなされた児童読物の良書選考に於て四十種のうち十種は実に本書院発刊のものであった。本書院の児童図書館運動の価値を裏書されたものと言へる。／小学児童文学読本の発刊は内容の優秀なる点に於て教育界に多大の歓迎受けている」と記されています。さらに「新かなづかい」について書かれていて、「これは極めて大事な問題と思ひ更に深重なる研究を行っている」とあり、刊行物のリストが載っています。

翌年の『出版年鑑』では、「出版界所感」という欄で、「アイデア書院 高井能」として文章が掲載されています。隣のページには岩波書店の岩波茂雄が書いています。

「出版界は多事多難の大正十五年をようやく登りつめて来た」、「大正十六年こそ真の良き出版書の出でんこと希ひ」などとあり、こういう業界の年鑑で発言をしているということを考えると、刊行点数もありましたし、出版業界のなかでも存在感があったのかもしれないと推測できます。

ちなみにアイデア書院は雑誌『アイデア』に自社広告を載せていますが、それだけでなく、『出版年鑑』にも広告を出しています。ほかの媒体にも出広している可能性もあり、今後、調査しなければならぬことだと思います。

さて、アイデア書院の発行人＝代表者が高井能であり、彼がアイデア書院の出版活動で中心的な役割を果たしてきたことがわかってきました。ここまではアイデア書院について概説的にお話ししてきましたが、このあとはひとつ、山村暮鳥の『雲』という書籍を例に、編集作業の風景を見てみたいと思います。

### 山村暮鳥『雲』

アイデア書院では小川未明の童話集も刊行していますし、高村光太郎が『アイデア』に寄稿していますし、文

学者による活動の場になっていたこともわかります。ここでは、山村暮鳥の『雲』を取り上げたいと思います。函入りの書籍で、1925年1月の刊行とされています。

「雲」という詩は、中学校の国語の教科書にも掲載されていますので、ご存知かもしれません。そんな詩が、アイデア書院から出版されていたのです（以下は現代かなづかいにあらためています）。

おうい雲よ  
ゆうゆうと  
馬鹿にのんきそうじゃないか  
どこまでゆくんだ  
ずっと磐城平（いわきだいら）の方までゆくんか

この本の編集過程がわかる、書簡、手紙が残っています。群馬県立土屋文明記念文学館には、アイデア書院の編集者が山村暮鳥に宛てた手紙が所蔵されています。

スライドの画像がわかりにくいかもしれませんが、左は田口藤左衛門という、おそらく『雲』の最初の編集担当者だと思われる人物が1924年8月14日付で暮鳥に送った手紙です。同時並行で進んでいた『よしきり』のこと、それから、『雲』は「出来る丈け贅沢に又何處迄も御気に召すやうにと苦心して居ります」と書いています。田口という編集者が暮鳥という著者を気にしながら編集作業を進めている様子がわかります。右は、『雲』の函の案を図で示したもので、これは先ほどの田口という編集者が病気で、細矢清見という編集者が後任となったようなのですが、その人物から送られたものです。手紙には、紙質などについても書かれています。細かいところまで確認している印象を受けます。「目下出版界は非常に不景気ですので警戒して一千部ばかり刷っておいて明年更に再版をすることに高井氏がいたし度いと云って居られます。如何でせう」。出版界が不景気なのは100年前も同じようですが、やはりここでも「高井氏」と出てきて、高井能がアイデア書院の出版活動の方向性を決めていたことがわかるといえるでしょう。

次もおもしろいのですが、スライドの右の画像は実際の書籍『雲』の扉です。このタイトル文字、ちょっと変わってますよね。これに対してもやはり先ほどの編集者、細矢清見が手紙を送っています。暮鳥の次女である千草が「雲」と書いたのですが、「装幀の雲の字の事ですが、御送り下さいましたものは非常に面白いものと思ひます。／高井氏も面白いと云はれて居りま

す、が、あんまりに肉が細いので版にするに困るのだそうです。やはりあんな風で御嬢さんに、毛筆か、マッチの軸木の尖をつぶしたので書いて御送り下さいませんか」とお願いしています。ただ、これは12月6日付で、実は暮鳥は体調が悪く、このあと12月8日に亡くなります。よって、見ていない可能性が高い書簡です。

暮鳥は12月8日に亡くなり、11日に葬儀がおこなわれるわけですが、暮鳥にとってこの『雲』という詩集は思い入れのあるものだったようで、それを汲んだアイデア書院、高井能は慌てて仮の本をつくったようです。それが、2012年の夏に、茨城県立歴史館で発見されます。当時、現地では話題になったようで、地元の新聞ではかなり報道されています。『茨城新聞』（2012年9月14日）や『読売新聞』茨城版（2012年9月15日）には「幻の仮製本」とあります。わたくしもこれを知って、当時、見にいきました。

群馬県立土屋文明記念文学館には、高井能の手紙も残っており、「『雲』の特別製本一冊この二三日中に製りて急送申上げます。御葬式の御日取を御知せ願ひます」と、妻である、土田富士宛てに送っています。

その「仮製本」、「特別製本」とはどういうものかという、スライドの右が市販されたもので、左が「仮製本」です。最終的に市販されたものとは違う印刷・製本がされています。2冊つくられて、1冊は暮鳥の棺に入れられ、もう1冊が茨城県立歴史館で見つかったということです。急いでつくったからでしょう。函にはタイトル文字のラベルがありません。本の背も違います。タイトル文字の位置が違います。表紙のデザインも違います。「特別製本」は、月の部分が金色になっています。先ほどの暮鳥の娘の書いたタイトル文字も、「仮製本」には間にあわなかったようです。奥付も、印刷日、発行日が違います。「仮製本」は「大正十三年十二月十日印刷」で「大正十三年十二月二十日発行」となっています。正式には、「大正十三年十二月二十四日印刷」で「大正十四年一月一日発行」として流通されています。

このように、幻の本が存在し、それが見つかった。そして、高井能という人物は、暮鳥のためにわざわざこんなことをした、ということです。このエピソードにわたくしは、編集者として、出版人として、あるいは人間として、非常に心打たれるものがあります。

小原國芳も暮鳥の遺族宛てに手紙を送っており、「奥様 何といふ悲しい知らせでせう！」「謹んで御悔み申し上げます」、「私の一番すきな詩人でしたのに」と

いうように書いています。これは、水戸にある暮鳥会が管理している書簡です。

このように、アイデア書院と暮鳥に関するエピソードと資料を紹介しましたが、ここでは一冊の本を、著者のために、そして読者のために、出版社が、編集者が、懸命につくっている姿が伝わってくると思います。小原國芳も、ここに関係していた。小原國芳が好きな詩を子どもに読ませたいという思いがあったから、アイデア書院はつくったと考えられます。学校出版事業という観点から考えますと、すでに玉川学園の出版部となる以前から教育的な側面を多分にもっていたといえるでしょう。

このほかにも、アイデア書院は「児童読物」を多く刊行していました。たとえば『ふしぎなお庭 まりちゃんの夢の国旅行』（鷲尾知治編、1925年）はルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」を翻訳したものです。挿絵は斎田喬。斎田は小原國芳に招かれて成城小学校の教員になった人物で、雑誌『アイデア』にもしばしば登場しますが、児童劇・学校劇作家で、また児童文学、「児童読物」の挿画も描きました。アイデア書院、玉川学園出版部以外の出版社でも活躍しました。また、挿画という観点でいうと、武井武雄といった児童文学史上、あるいは美術史上でも著名な童画家による出版物もあります。アイデア書院はもちろん、「小原國芳氏の一生の事業」である「学校経営」、「教育の王国」実現のために設立されたのでしょうが、雑誌『アイデア』創刊号の巻頭論文「児童図書室論」に象徴されるように、子どもの本をめぐる出版活動が活発でした。全人教育を広めるためにつくられたともいわれますが、自ら児童図書室を建設し、レコードや名画なども扱っていたことを考えれば、単なる出版活動ではなく、幅広く子ども（児童）のために活動する組織であったといえると思います。

### 「玉川学園出版部」へ

小原國芳は『アイデア』1929年10月号で、「アイデア書院がいよいよ、本来の目的でありました「教育王国建設への奉仕」を徹底的に果すべき秋が来ました。過去七ヶ年の長い苦闘でした」と書きます（「アイデア書院と玉川学園出版部との合体」）。

兄弟分の学校としての玉川学園では、特に労作と体験とを主体といたしますので、出版事業も必然、教育材料として加へられねばなりません。

活字作り、活字拾ひ、組み、紙型、印刷、製本、

広告、荷送り、発送、会計など、さては編輯、校正、口絵、装幀等の実にさまざまの貴い教育が出版といふ一つの仕事からでも生れて来ますことを思ひますと、どうしても学園にも出版部を創めざるを得ませぬし、必然、学園の出版部にアイデア書院も合体すべき本来の運命を持って居ますので、いよいよ今秋を期して一つになることになりました。

教育、学校に必要なだとして、「出版事業」を「教育材料」としてしています。玉川学園には印刷部が設置されませんが、労作教育として児童・生徒が活字を拾い、本づくりの一端を担うようになるのは、この延長でしょう。

アイデア書院に関して時間を使いすぎてしまいました。このようにアイデア書院の活動は玉川学園創立前の事業として、出版・編集を万全にしていたこと、教育という面に寄与していたことがわかったかと思ひます。

## (2) “児童百科”の時代

アイデア書院は玉川学園出版部に「合体」します。ここまで、アイデア書院に関するエピソードで時間を割いてしまいましたので、本日のこのイベントのもうひとつの記念とされる「児童百科辞典刊行 90周年」については、かんたんに触れるにとどめたいと思います。

1929年（昭和4年）にアイデア書院と「合体」した玉川学園出版部は、1932年（昭和7年）に日本で初めて子ども向けの百科事典（小原國芳は「辞典」とする）を刊行します。沢柳政太郎が小原國芳への外遊みやげとして持ち帰った、イギリス人のアーサー・ミーによって編纂されたアメリカの児童百科事典 *The Book of Knowledge* に影響を受けたものが最初です。

スライドには、かつてわたくしが出版部に所属していた際に作成した「子どもの／と本カタログ」のはじめのページを映していますが、このように玉川学園ではいくつかの“児童百科”を、かたちを変えながら刊行してきました。このカタログには8種類の“児童百科”を載せていますが、このあと2016年から19年に、現在の学長先生、小原芳明監修の『玉川百科 ことも博物誌』全12巻を刊行しました。刊行をスタートさせたときには、先ほど、このイベントの冒頭で紹介された荒俣宏さんにも推薦文を書いていただいて、「ふしぎに思うことは、「わかること」の始まり」というコピーをつくりました。

しかしこの最初の“児童百科”である『児童百科大

辞典』は、沢柳が1921年から翌22年まで欧米の教育を視察していたこと、また全30巻といった規模の大きなものであることを考えると、アイデア書院時代から企画・編集が進められていたと考えるのが妥当でしょう。

玉川の“児童百科”の特徴のひとつは分野別、いわゆる大項目主義ですが、『児童百科大辞典』（1932～37年）の全30巻の構成は、動物、植物、生理・衛生、物理、化学、国防、天文・気象、地理、歴史、数学、美術史、美術教育、文芸、地質・鉱物、音楽・舞踊・体育、家庭・公民、修身、哲学・宗教といったものです。これらは現在、国立国会図書館のデジタルコレクションで見ることができます。

この巻構成のなかで注目すべきことのひとつは「国防」というテーマで1巻を設けていることで、これは当時の時代背景をととても反映していると思います。この「国防」の巻で思い出すのは、わたくしの在職中にとある読者の方から、『児童百科大辞典』の「国防」の巻を子どものときによく読んで、それがきっかけで飛行機をつくる会社に就職したという話を聞きました。『児童百科大辞典』は多くの方に読まれたということでしょうし、子どもの頃に読む本の力というのは、それほどまで大きくあるのだと実感しました。

話が逸れてしまいましたが、この時期、1931（昭和6）年に平凡社が『大百科事典』（全28巻）の刊行を始めました（～1935年）。また、子ども向けでいうと、平凡社は1951（昭和26）年に『児童百科事典』（全24巻）を刊行し始めました（～1956年）。玉川の“児童百科”については、岡野他家夫が『日本出版文化史』（原書房、1981年）で、「翌七年にも多数の大物が続々現れたが、先ず玉川学園出版の『児童百科大辞典』全三十巻を筆頭に、新潮社の『日本文学大辞典』全四巻、それに富山房の『大言海』博文館の『新修漢和大辞典』はいずれもまさに永遠の書ともいえる価値のある出版物だった」と述べ、当時の事典・辞典類でも特徴的な刊行物であったことがわかります。

また、『児童百科大辞典』は内容見本も作成され、新聞広告も何度も掲載しています。スライドには『東京朝日新聞』に打った広告を映していますが、このように大きく宣伝をしていたようです。ここで目につくのは、「教育立国」ということばです。「教育の王国」ということばがアイデア書院時代の書籍にありましたけれども、ここでも「日本に初めて生まれました！／茲に教育立国の基礎成る。」というコピー。「教育立国」ということばが使われています（『東京朝日新聞』1932年

4月21日）。

先ほども申し上げましたとおり、玉川の“児童百科”はこのあとも刊行されます。わたくしが個人的に、編集者としておもしろいつくりだと感心するのは『玉川こども・きょういく百科』（1979年）で、ひこうき、ふね、でんしゃ、じどうしゃ、おおむかしのせいかつ、ちきゅう、うちゅう、けもの、かちく、とり、むし、さかな、はなとき、えんげい、あそびとおもちゃ、かずとかたち、ことばともじ、こどもえいご、えとこうさく、うた、つよいかからだ、せかいめぐり、にほんめぐり、いえ、ともだち、おみせとおかね、つち、みず、ひ、おかあさんのほんといった全31巻のシリーズです。最初の“児童百科”とは対象の年齢層が違いますが、巻構成も大きく違うことがおわかりかと思えます。

“児童百科”といっても対象や時代によってさまざまであり、そしてこういった歴史を引き継ぎ、わたくしも『玉川百科 こども博物誌』というシリーズの企画を立てました。

### (3) 大学出版の機能と役割

時間がなくなってきましたので、駆け足になってしまいましたが、最後に「大学出版」について触れておきたいと思います。

玉川学園出版部は、1947年（昭和22年）に玉川大学出版部と名称を変更しました。そして1963年（昭和38年）には、中央大学出版部、東海大学出版会、東京大学出版会、東京電機大学出版局、東京農業大学出版会、法政大学出版局、日本学術振興会、日本図書文化協会（東京教育大学）、早稲田大学出版部とともに、大学出版部協会を設立します。一時期は32大学出版部が加盟していたこともあるのですが、2022年12月現在、25出版部が加盟している団体です。全国には70くらいの大学出版部があるといわれた時期もあったのですが、協会に加盟している大学出版部は継続的な出版活動をしているところであり、「大学と社会を結ぶ知のネットワーク」というキャッチコピーを掲げています。

このスライドに取り上げているのは協会設立披露パーティーの「芳名録」の写真です（1963年7月11日、白金迎賓館、出席者113名。『大学出版部協会50年の歩み』大学出版部協会、2013年）。いちばん左に「小原哲郎」とあります。またこちらは、1972年11月のアジア・太平洋地域大学出版部会議レセプションで小

原國芳がスピーチしている様子です(『写真集 小原國芳 信』玉川大学出版部、1978年)。玉川大学出版部は、日本の大学出版においても存在感を示しています。

次は、小原國芳が鉛筆か赤ペンを片手に、ゲラ(校正刷)を確認している姿を写した写真です。同じく『写真集 小原國芳 信』からですが、1966年の姿として「出版事業家として先生はテキパキと歯切れよく、常に陣頭指揮であった」とキャプションが付けられています。小原國芳がアイデア書院時代から本づくりに積極的に関わっていることがわかる写真です。

大学出版は商業出版と違って利益を追求しないと思われがちですが、大学出版にもさまざまな形態があり、現在の玉川大学出版部は、学校法人玉川学園の収益事業部門に位置づけられています。つまり、学校本体(教育部門)とは別会計の、独立採算制です。ですので、ただ良書を出していればいいというだけでなく、売上も考えなければなりません。そして、収益事業ですから、学園の経営に還元しなければなりません。

大学出版には、当然ですが、それぞれ母体の大学があります。ですので、各出版部は母体大学との関係で運営されています。母体がないと、成り立ちません。玉川の場合は、幼稚園から大学院まである総合学園を母体としているわけです。ですので、玉川大学、玉川学園の方針のもとに出版活動をおこないます。大学出版は専門書、教科書、教養書といった学術書を刊行すると考えられますが、アイデア書院からの歴史もあり、また総合学園における出版部であるという背景もあり、児童書もラインナップの大きな柱としています。そういう意味では、「教育学術書」という呼称が適切かと思えます。

大学出版部の刊行する学術書は、著者が書き、出版社がつくり、書店や図書館などを通して読者が読み、またその読者が著者となることもあり、学術情報を環流させる役割をもちます。スライドは箕輪成男さんの『出版学序説』(日本エディタースクール出版部、1997年)で示されている図ですが、この円環、サイクルが、学術研究を発展させるのです。

また、一方で、メディアの多様化、デジタル化にともない、学術コミュニケーションの様態は急速に変容しています。鈴木哲也さんをご自身の著書で「二回り外、三回り外」といういい方をしています。学術書はその専門の中だけで完結するのではなく、二回り、さらに三回り外の読者に向けたコミュニケーションをとるような編集、執筆を促すような行為をしなければ、これからの大学出版あるいは学術出版は成り立たない

だろうということです。「二回り外、三回り外」ということは、とても示唆的なものかと思えます。

ほんとうはこのパートでもっと話すべきことがあるのですが、箕輪さんや鈴木さんの著書も含め、ここに現在の大学出版を考える際の文献として主要なものを挙げておきます。大学出版におけるわれわれの先輩の方々によるものです。ご興味のある方はぜひ参考にしてください。

- ・鈴木哲也・高瀬桃子『学術書を書く』京都大学学術出版会、2015年
- ・鈴木哲也『学術書を読む』京都大学学術出版会、2020年
- ・橋宗吾『学術書の編集者』慶應義塾大学出版会、2016年
- ・長谷川一『出版と知のメディア論 エディタースHIPの歴史と再生』みすず書房、2003年
- ・箕輪成男『情報としての出版』弓立社、1982年
- ・ウィリアム・ジャマーノ『ジャマーノ編集長 学術論文出版のすすめ』松井貴子訳、慶應義塾大学出版会、2012年

## おわりに

最後に、小原國芳のことばを紹介します(「子どもは哲学者である」『玉川児童百科大辞典 活用の手引』)。

私は根っからの出版屋ではないのです。教育一筋に60余年、「全人教育」を提唱して戦いつづけている教育者です。玉川学園を創設して研鑽と実践を重ねています。講演に、テレビに、寄稿に、出版もその一環です。大正年間から著作や重要な教育書を数多く出版してきました。

マコトの人間形成のため、欠くことのできないものとして、素人の勇敢さで『児童百科大辞典』全30巻を刊行したのは昭和7年のことです。

こんなにまで多くの出版物に関わっていながら、「私は根っからの出版屋ではない」といい、自分は「教育者」であると述べています。もちろん、「教育の王国」実現のためのアイデア書院でした。小原國芳は、出版活動に積極的にコミットする「教育者」でした。

アイデア書院から始まった出版活動、玉川学園の出版活動は、100年続いているわけですがけれども、この継続性が非常に重要だと思います。教育学術書を刊行し

続ける。わたくしが現役で企画を立てていた頃、「玉川」という特徴、「大学」という質の担保、「出版」という公共性を意識していました。大学出版部協会のキャッチフレーズ「大学と社会を結ぶ 知のネットワーク」にあるように、メディアとなって結ぶのは大学出版部です。マーシャル・マクルーハン「メディアはメッセージである」といいました。また、今日のイベントのタイトルから拝借すると、メディアはアイデアである。大学出版部は、その存在自体がメッセージ性をもつものなのです。アイデア書院の高井能、「児童百科」における小原國芳など、継続されてきた編集作業を垣間見てきましたが、100年間継続されてきたものを遡ってみると、玉川大学出版部は教育に積極的に関わるというメッセージ性をもった出版社・組織であり、メディアであることは明らかです。これまでの歴代の編集者が残してきたものがあるからこそ、いまのブランドがあります。わたくしもこの100年のなかの16年8ヵ月という時間を共有し、出版物をつくってきたわけですが、何を残すことができたのだろうか、メディアとして媒介できたのだろうかと自問します。

本日、このようなイベントが開催され、こんなにも出版に愛を注いでいる学校は存在しないのではないかとさえ思います。ぜひ玉川大学出版部、玉川学園においては、今後も出版活動、出版事業を大事に進めていただければと願っております。

最後に、今回の講演にあたり多大なご協力をいただいた、玉川大学教育学術情報図書館、玉川大学教育博物館、玉川大学出版部、群馬県立土屋文明記念文学館、暮鳥会、梅花女子大学図書館に感謝申し上げます。

なんだか資料の紹介や個人的な体験に終始し、雑駁なものになってしまいましたが、わたくしのお話とさせていただきます。ご清聴、誠にありがとうございます。